

出展：

慶應義塾大学大学院経営管理研究科（ビジネススクール）

「実践的授業方法について考える」ニューズレター（第10号・2007/10/31）

実践的授業法取組紹介.....

このコーナーでは、大学教員による実践的授業方法への先進取組を「私の履歴書」風に紹介して参ります。今月は、東京農工大学で技術経営教育におけるFD（Faculty Development）に積極的に取り組まれている中村昌允先生の最終回です。

～ 技術経営教育における農工大FDの歩み ～

東京農工大学大学院 技術経営研究科  
技術リスクマネジメント専攻 教授 中村昌允先生

### 第3回 3年目「技術リスクマネジメント教育の実現に向けて」

前号までにご紹介してきた内容は、1年目に講義の形をつくったこと、2年目に授業の質的改善に着手したことでした。最終回の今月は、それ以降の、そしてこの先に向けた取組をご紹介します。個人的な感想ですが、FD取組は先に進めば進むほど、ハードルの高い課題にも直面しますが、先に進めば進むほど、その学校の競争力を決め得るものになる気がしています。

前号までの議論で、私たちには農工大が行うMOT教育に必要な基本条件が、ほぼ見通せています。それは、「実践力が身に付く教育」です。実践力は実社会において職位が上になるほど必要となり、通常それはキャリアを積む都度、身に付いていきます。通常でしたらこうして長いキャリアを経て身に付く実践力が、MOTプログラムに2年間在籍することで、速やかに、かつ深く身に付く授業をしたい、というのが私たちの願いです。

ここで、その具体策として私たちが注目した「ケースメソッド」に話を戻します。私たちがFDに関連するテーマを議論する場として、「FD会」があります。開催は不定期ですが、こうした教員ミーティングを年に数回程度行っています。ケースメソッドもFD会のテーマとして扱いました。私たちはこれまでに2回、外部講師を招いてケースメソッド授業法に触れる機会を設けてきましたので、まずはその様子を報告します。

ケースメソッドをテーマにしたFD回の初回では、KBSから「ケースメソッドへの招待状」（DVD）と「ケースメソッド教育ハンドブック」を購入し、全員で事前に視聴、読了した上で参集して、外部講師との意見交換を行う場として開催しました。予想していた以上にたくさんの質問が飛び交い、予定していた2時間があっという間に終わりました。

教員たちにとって、日頃から何となく気になっているケースメソッド授業について、自由に質問ができ、意見も言える場というのはウエルカムだったのだと、このとき私は確信しました。そして、次回も同じテーマで引き続き開催できると、自信を深めました。でも、次の手をどうするか。ここでかなり悩むことになりました。もう一押ししたいときの、「もう一押し」をどのようにするかです。

この時点ですでに、ケースメソッド授業を行っている教員（米国の大学院でMBAを取得した人たちの一部）も何人かいて、その人たちの授業評価が高そうだという評判がありました。また、今回のFD会で、外部講師の生々しい話もあれこれ聞いて、そういう授業のよさにも改めて触れました。そして、自分もやってみようという人が、少なくとも何人かは出てきました。でも、実際に自分でやるにはまだまだ情報不足なのです。

必然的に次回用に、「FD会で誰かが実際にケースメソッド授業をやってみよう」というアイデアが浮上りました。結論から言いますと、この役は私が引き受けました。結果を先に書きますと、決してうまくできたわけではなく、先生たちから言いたい放題（笑）のコメントをもらい、実は少し傷つきもして、あとで外部講師に傷の手当をもらった次第です。プライドも何も捨てて、私はモルモットに徹したわけですが、ここを通り抜けたことで私たちは前に進めたと思います。

また、ファカルティが集まるFD会でこのような授業デモを行ったことがきっかけになって、たいへん嬉しいことが起こりました。私たちの研究科の専攻名称である「技術リスクマネジメント専攻」らしい授業、すなわち、「技術が重要な考慮要因となる経営意思決定場面に潜む”risk”と”reward”を入念に検討し、最適解を導き出すための授業」の実現度合をどのように高めていくかという論点に、FD会の議論が向かったことです。

ケースメソッドを理解したことがきっかけとなり、こうした議論が始まったことで、私たちは授業方法の検討から一歩踏み出して、技術経営研究科技術リスクマネジメント専攻が目指すべき、授業カリキュラムと授業方法のあり方を総合的に

視野に入れつつあります。開校3年目ではカリキュラム改善もひとつの重要テーマですので、内々の議論が何とか遅れずに間に合って立ち上がったことを、研究科長も喜んでいないのでしょうか。

その後に行った直近の調査では、自分の授業にケースメソッド授業法を採用する可能性について、約2割の教員がすでに何らかの形で実際に授業に取り入れており、約5割の教員はFDなどを通して、この手法を身に付け、自分の授業で使っていきたいと答え、残る3割の教員は自分の担当科目には馴染まないだろうが関心は持っていると答えています。

農工大は夜間の社会人大学院であることから、ケースの予習負荷をどのようにコントロールするか、慶應などでやっているグループ討議/クラス討議を、90分の授業時間の中でどのように実現させていくかなど、私たち自身で解決していかなければならない課題も山積しています。

しかし、私自身、自分が実務家教員であることをもう一度踏まえると、「どうすればこれまで身に付けてきた考え方や手法を次の世代に向けて発展的に伝えていけるか?」はもっとも重要な教育課題です。学生からは「先生の話は他の業界でも使えますか」と良く聞かれます。MOTでは一つの業界で成り立つ話がより一般化され、普遍化された知識にしていくことが求められています。MOTは多様な業界から様々な経験を持った人が集まってきており、お互いの知識と経験を交流する機会に恵まれています。それをより有効な形にできるのが、ケースメソッドではないかと考えています。

また、ケースメソッド授業を行っている竹内先生を見ていると、先生はこの授業のためにどれだけの準備をしてきているのだろうかといつも感心します。ケースメソッドというのは、講義で教えるときよりもたくさんの準備が、授業の直前のみならず、日頃からも必要になる授業方法だということがよく分かります。

私たちはケースメソッド授業をよりよく行うために、これまで企業で身に付けてきたことはもちろんのこととして、常に最新の実社会の情報や動きを反映していく必要があります。賞味期限が過ぎた実務家教員といわれぬように、時間を見つけては、新しい経験を積んで授業のリニューアルを心掛けています。その意味では毎日が研鑽の日々です。

.....